

「それからの定有堂」

その十九

## 二十歳のエチュード

奈良 敏行

(笈の定有)

「笈の定有」は時計の針を巻き戻す。メビウスの輪のように漕がすが始原へと二回りする。「笈」の中には「オブセッション」が詰まっている。

十八歳のある日、小さな川の脇を歩いていた。向かっていたのはバス停だ。近づく進学の日々に想いを馳せてうつむぎ加減だった。通りすがりの男性に声をかけられた。「何を考えているの?」と。彼はわたしが深い思索に集中しているかと勘違いしたらしい。「僕の家、近くだから寄っていいかない」と誘われた。そこはアトリエで絵画がたくさんあった。それから時々遊びに行くようになった。類さんといった。ただそれくらいのことしか覚えていない。上京が近づいた頃、別れに一冊の文庫本をくれた。それが原口統三

『二十歳のエチュード』だった。わたしは法学部へ進学しようとしていた。ただ二人の国語の教師が自分の母校へ進学するように勧めたので文学部にも願書を出していた。結果、両方とも合格した。迷った末、この本のせいもあり文学部を選んだ。

『二十歳のエチュード』は十九歳九月で入水した人の遺稿集だ。それは「純粹精神」の遺稿と世を騒がせた。この本でランボオ、ボオドレル、ヴァレリイなどを知った。彼は親友にこの遺稿の刊行をゆだね、跋文に「その時、彼ははちだった」と書き出して、「その時、彼ははちだった」という言葉で結ぶことを要求した。ここには閉ざされた時間が凍結している。わたしの二十歳のオブセッションの源でもある。

この度五十年ぶりに読み返して、驚いたことがあった。自分の「ノート」の中の言葉だと思っていたら、じつは原口統三の言葉だったという気づきだ。

《ところが、今日、僕はふと、「寒い」と思ったのだ。》

《窓の内側に住む孤独と、窓の外側に立つ孤独と。》

《理解されようという願い、これも一つの弱気に過ぎない》

これは時自分自身の二十歳のオブセッションだと思っていた。違っていたのが意外だった。ある意味、原口統三

の言葉を生き続けていたのだ。

「純粹精神」、これはわたしに憑依したオブセッションだった。

《精神のより深奥を目指して進むものは、より「生きる」とから遠ざかるのである。》

そして彼は、「『地獄の季節』、この小さな書物が僕の唯一のバイブルであった。」とわたしを誘惑する。ランボオの「また見つかったぞ、何が、永遠が、海に溶け込む太陽だ」という詩が原口の心に反復し続ける。原口統三はその詩「海に眠る日」の末尾にこんな希望を書き記している。

《ああ こんな恍惚の夢のような日は

どこの海辺で待っているのか》

そう記した二年後に逗子の海岸で入水する。十九歳九月だった。

彼は「僕の誠実さが僕を磔刑にした。」と書く。わたしの二十歳の頃、大教室で「自裁論」という小論を授業そっちのけで書いていたら、隣に座っていた男が「ケッ！」と一言つぶやいて立ち去った。興ざめしてそれきり書くのをやめた。原口統三の「誠実」さは「外部」に出るしか解決のつかないものだった。『二十歳のエチュード』の問題をわたしはポオーボードレール→ランボオーヴァレリーという救済の系譜で考え続けていたが、ずいぶん無駄な時間

を過ごした後に、「外部」へ出るしかないと思に至った。この「外部」も外部から来る必要があった。いつかこの「誠実」にも疲れた。原口統三もときおり覚醒して次のように書いている。

《ところが、今日、僕はふと、「寒い」と思ったのだ。》それは認識の極北だ。自分の成熟の涯てに到達した明晰さだと思ったが、この度自分の言葉でないのに気づき複雑な気持ちだった。

ともあれ、こうした二十歳のオブセッションを背負ったまま、わたしは三十歳で「本屋」を開業した。本屋のオブセッションの始まりだった。

2025.02.17

(参考)

原口統三 『二十歳のエチュード』角川文庫 1952

原口統三 『二十歳のエチュード』光生社 2001

清岡卓行 『海の瞳』文春文庫 1975

笈の定有